第三章　名物刀剣の焼失

本阿弥光徳によって選別された名刀の多くは大坂城に収蔵された。そして、元和元年（一六一五）の大坂城落城のとき、多くの名刀が火を被ることになった。

江戸幕府を開いた徳川家康の下に、大名たちは挙って名刀を献上した。家康は、大坂城で火を被った名刀数点の再刃（焼直し）を越前康継に命じている。その後、明暦三年（一六五七）一月、江戸市中は大火に見舞われ、江戸城本丸・二の丸が焼失、多くの名刀が火を被った。織田信長の名物義元左文字もこの時に火災にあったが、信長の故事を記録した銘を惜しんで、後に再刃されている。

24

脇指　銘　吉光
名物　鯰尾藤四郎

付　蠟色塗脇指拵

刃長一尺二寸七分（三八・五cm）
茎長三寸二分（九・七cm）
鎌倉時代（十三世紀）
安土桃山時代（十七世紀）に再刃
徳川美術館

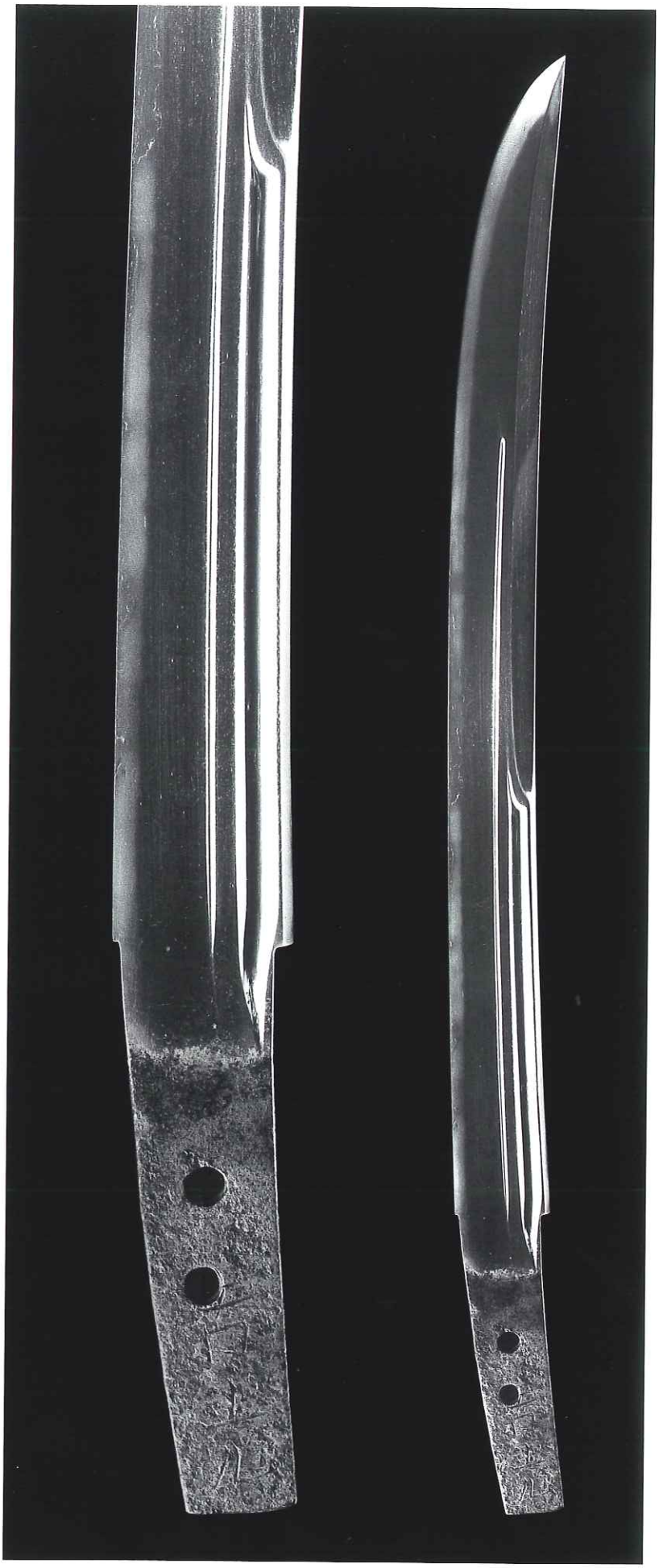
山城粟田口吉光の作は、室町時代から相模国正宗とともに愛され、江戸時代後期になると、正宗・越中江義弘とともに天下三作の一人の作として、珍重された。

長刀直し、表裏に長刀樋があり真の棟、先反り。地文は小板目つみ梨子地。刃文は直刀ごころに小乱れ交じり。鋩子は小丸尖りごころに返る。茎は少し磨り上げ先一文字、鑢目右手下がり、棟平、目釘孔二つ。銘は「吉光」と二字大振りに切る。

もと長刀であったものを脇指としたため、その形が鯰の尾に似ているところから、本作の名称となったと、『享保名物帳』に記されている。『本阿弥光徳押形』に「長さ一尺二寸八分半、御さし用、秀頼様相口（合口）拵、両度寿斎仕候」とあり、豊臣秀頼が好んで用いたことが知られる。大坂落城の際焼けたのを、家康の命によって、初代越前康継が再刃した。家康の遺産「駿府御分物」として、尾張初代義直が受け継いだ。

蠟色塗脇指拵が付属する。

『光徳刀絵図集成』（寿斎本）



蠟色塗脇指拵

25

短刀　銘　嘉暦三年八月　相州住正宗

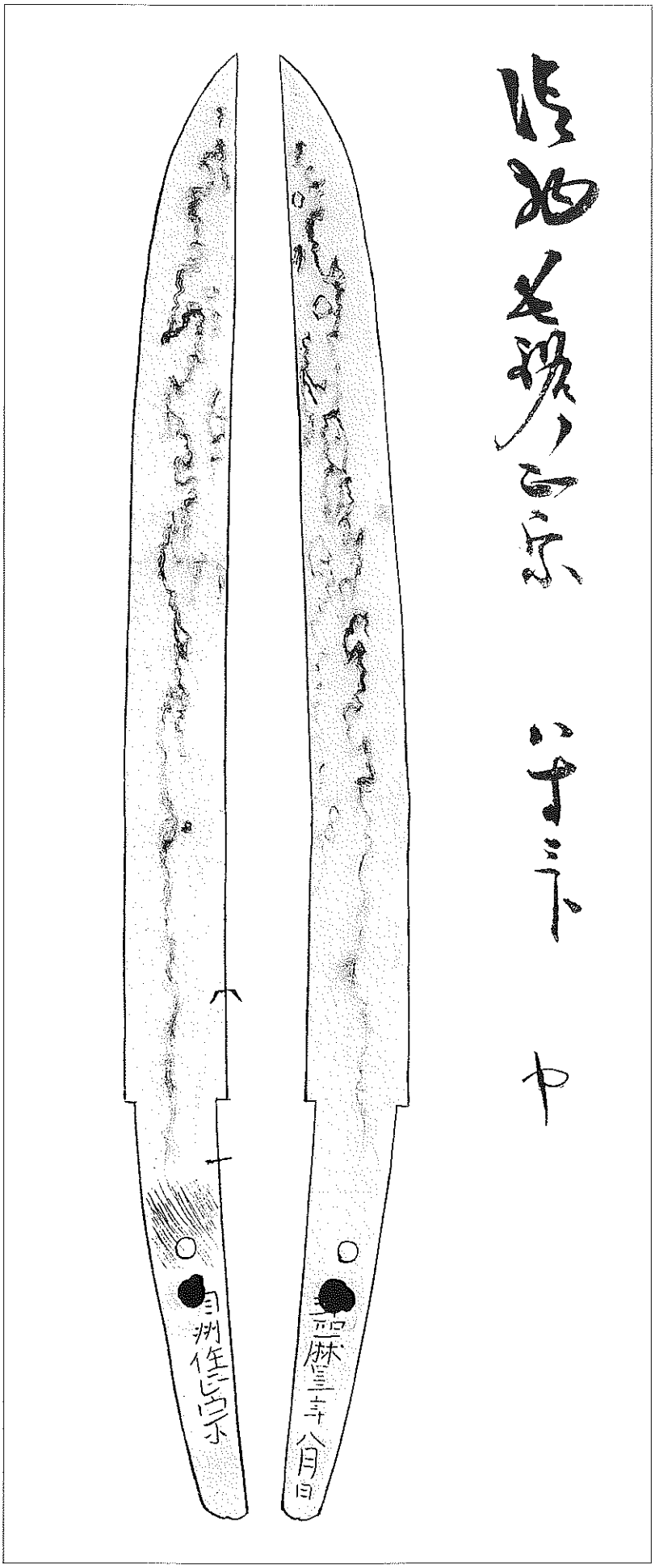
名物　大坂長銘正宗

刃長八寸六分（二六・一㎝）
茎長三寸四分（一〇・四㎝）
鎌倉時代（一三二八年）
安土桃山時代（十七世紀）に再刃
徳川美術館

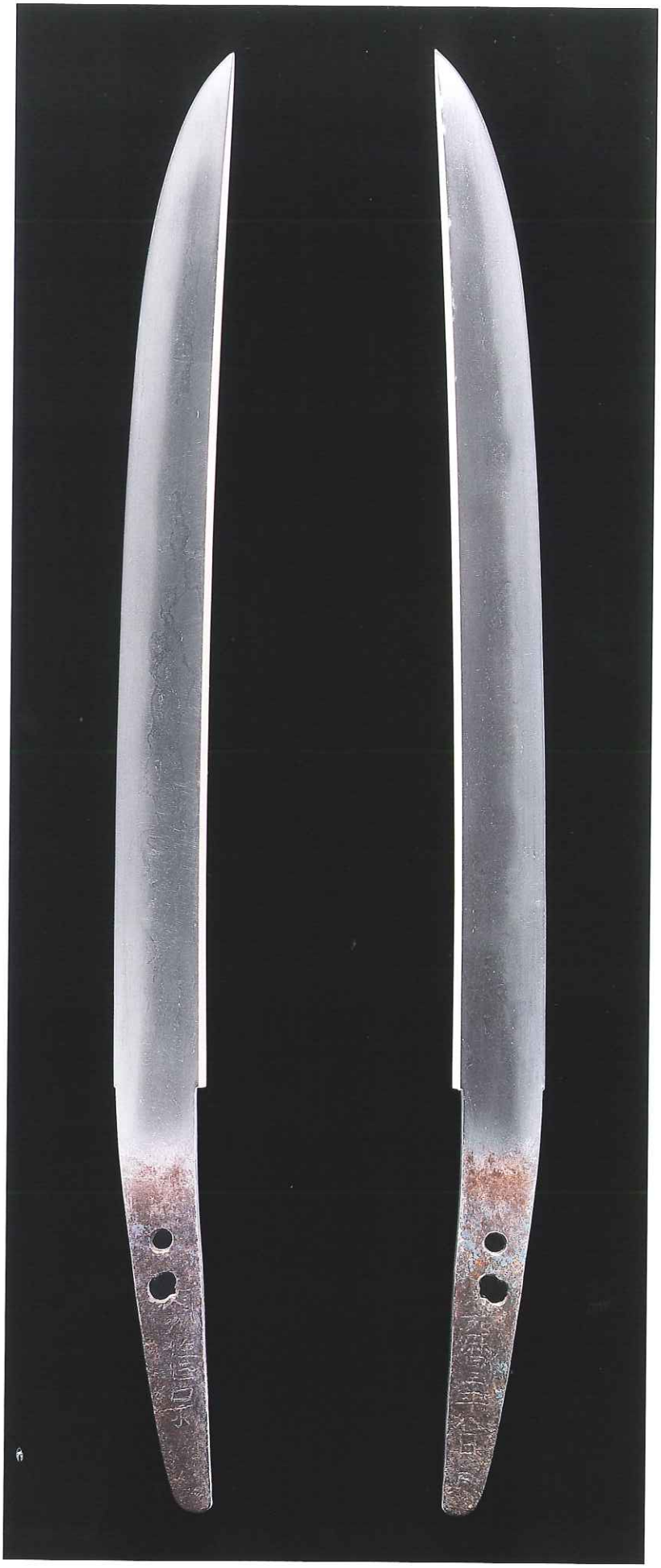
『享保名物帳』の焼失の部に所載された品である。

平造り、真の棟で反りがある。地文は大板目よくつむ。刃文は皆焼刃の小沸出来である。所々砂流しがある。鋩子は突き上げごころに小丸に深く返り、棟焼となる。茎はやや振り袖で先細って栗尻。少し区送りで、刃棟すられる。

名物若江十河正宗・鯰尾吉光と同様、『豊臣家御腰物帳』によって秀吉以来、大坂城に蔵されていたことがわかる。大坂落城の際、戦火に遭ったのを、家康の命により初代越前康継が再刃した。家康の薨去の後、「駿府御分物」として尾張徳川家初代義直に贈られ、以後同家に伝来した。『埋忠銘鑑』に「秀頼様　寿斎金具　慶長十七年正月仕申候　長めい長八寸三分大坂ニテヤケ申候」とあり、『本阿弥光徳押形』（寿斎本）に「御物　長銘ノ正宗　八寸三分　ヤ」と記されている。



『光徳刀絵図集成』（寿斎本）



26

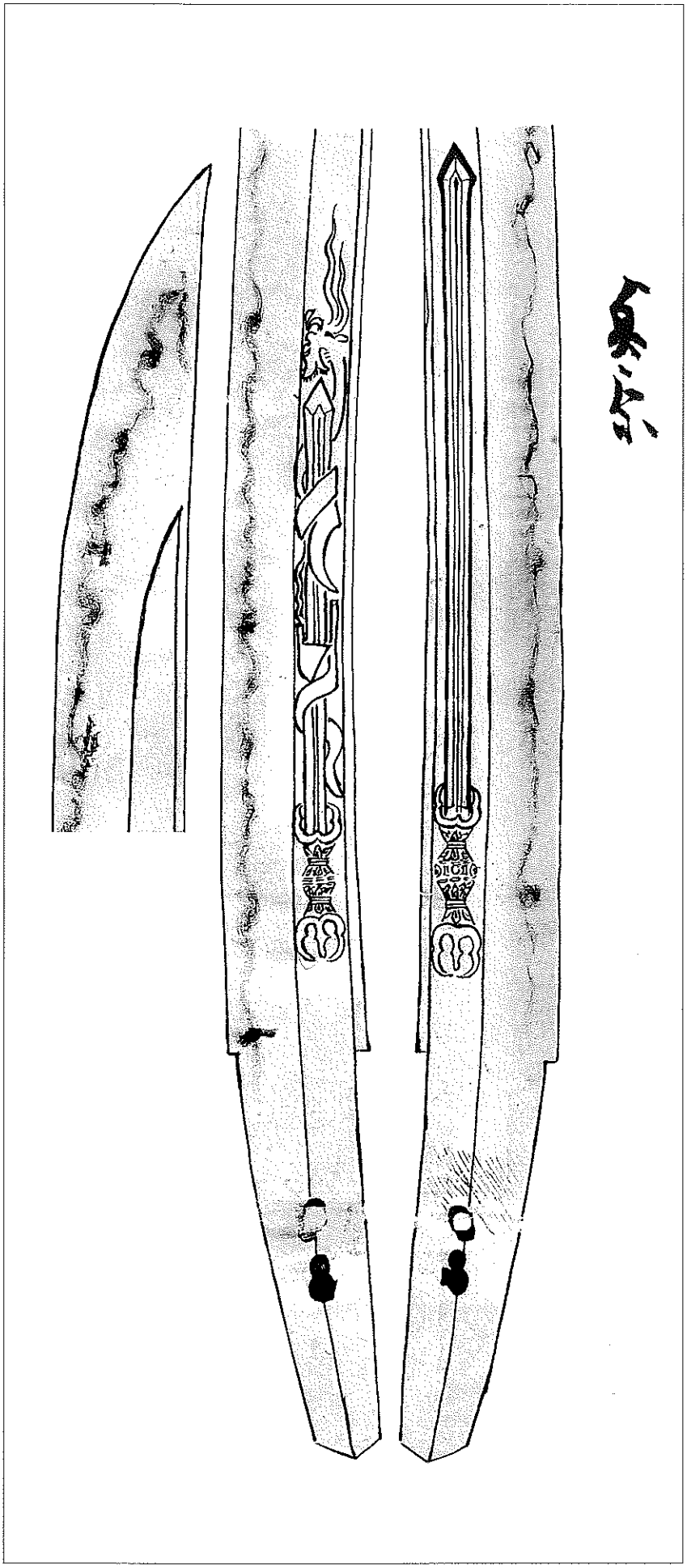
脇指　無銘　貞宗
名物　獅子貞宗

刃長一尺二寸五分（三七・八㎝）
茎長三寸五分（一〇・五㎝）
鎌倉～南北朝時代（十四世紀）
安土桃山時代（十七世紀）に再刃

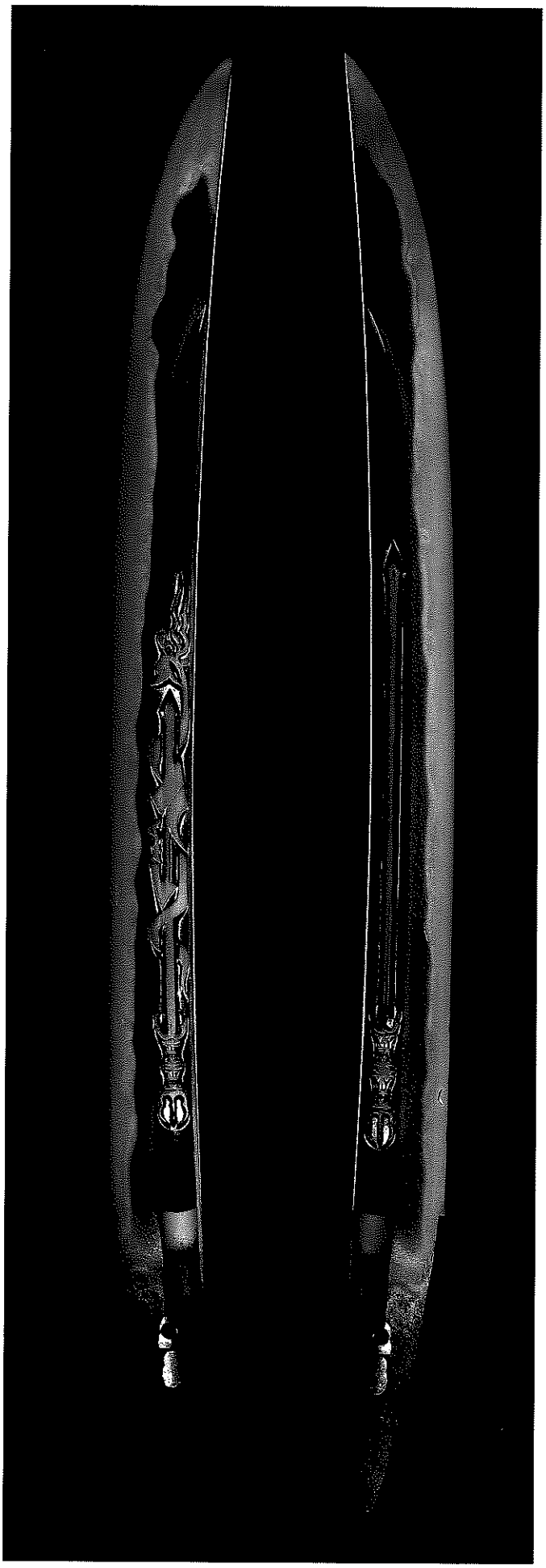
大坂城炎上のとき火中にあった脇指である。姿は平造り、三つ棟、身幅広く、重ね厚く、僅かに反り、ふくら枯れる。地文は板目。刃文は小沸深くつく。刃文小沸深くつき、小のたれ調の小乱れ、小足入る。鋩子は乱れ込みやや寄って返る。彫物は表裏幅広い樋を掻き通し、樋中に表は草の倶利伽羅を、裏は三鈷柄剣を浮き彫りにする。茎は生ぶ、先検形、目釘孔二つ（内一つ埋め）。現在目にする姿は、康継によって再刃されたものと伝えられる。

貞宗は正宗の子とも養子とも伝え、正宗の作風をよく継承し、姿形は時代の流れに従い大振りに変わるが、品格の高さは親譲りである。彫りに特色があり、卓越した彫り物が多い。

本刀は『豊臣家御腰物帳』の慶長十七年（一六一二）十二月十四日付け片桐市正の記録によると、大坂城において第一箱に納められていた。また、元和元年（一六一五）十二月奥書の『光徳刀絵図』（寿斎本）にも押形が描かれている。しかし、元和元年五月に大坂城は落城、本刀はその中にあった。その後家康の命により康継が再刃をした。実に見事な焼き直しの技術である。「獅子貞宗」の銘は、拵の目貫に獅子が備えられ、それ故の名であると『享保名物帳』にある。本刀は長く西条松平家に伝来した。



『光徳刀絵図集成』（寿斎本）

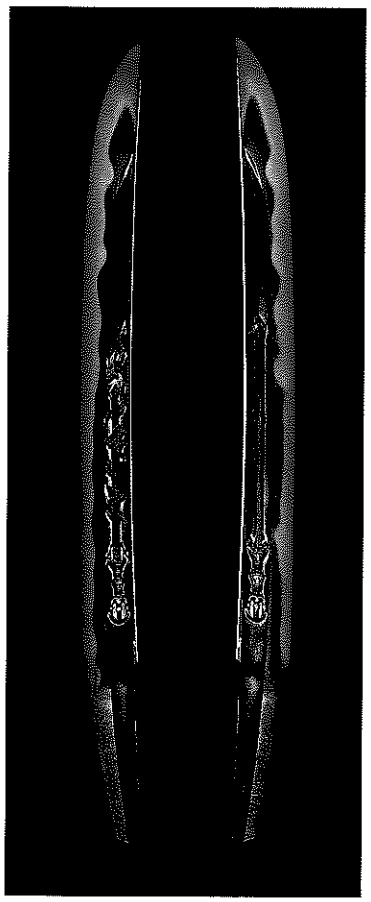


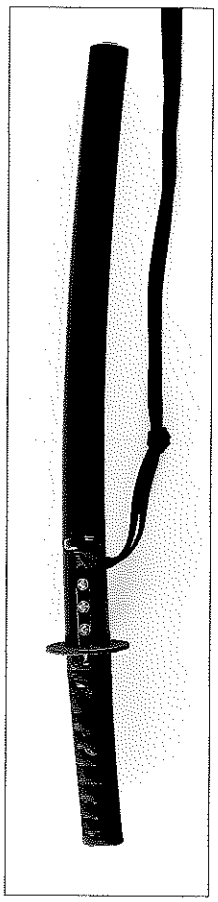
脇指　銘　本多飛驒守所持内　越前国康継
なんばんかね　しし貞宗のうつし

付　黒漆塗小脇指拵

刃長一尺二寸三分（三七・三cm）
茎長三寸五分（一〇・六cm）
江戸時代（十七世紀）

越前康継が、名物獅子貞宗を再刃するとともに、自らもこれの摸作を数点製作していて、本刀はその一点で、「しし貞宗のうつし」と明記しているのは本刀のみである。所持者本多飛驒守は、越前福井藩の付家老本多成重（一五七三～一六四七）のことで、越前丸岡藩初代藩主となり徳川将軍家譜代大名となった。





27

重要文化財

脇指　無銘　伝吉光

名物　骨喰藤四郎

刃長一尺九寸四分(五八・八cm)

鎌倉時代(十三世紀)

江戸時代(十八～十九世紀)に再刃

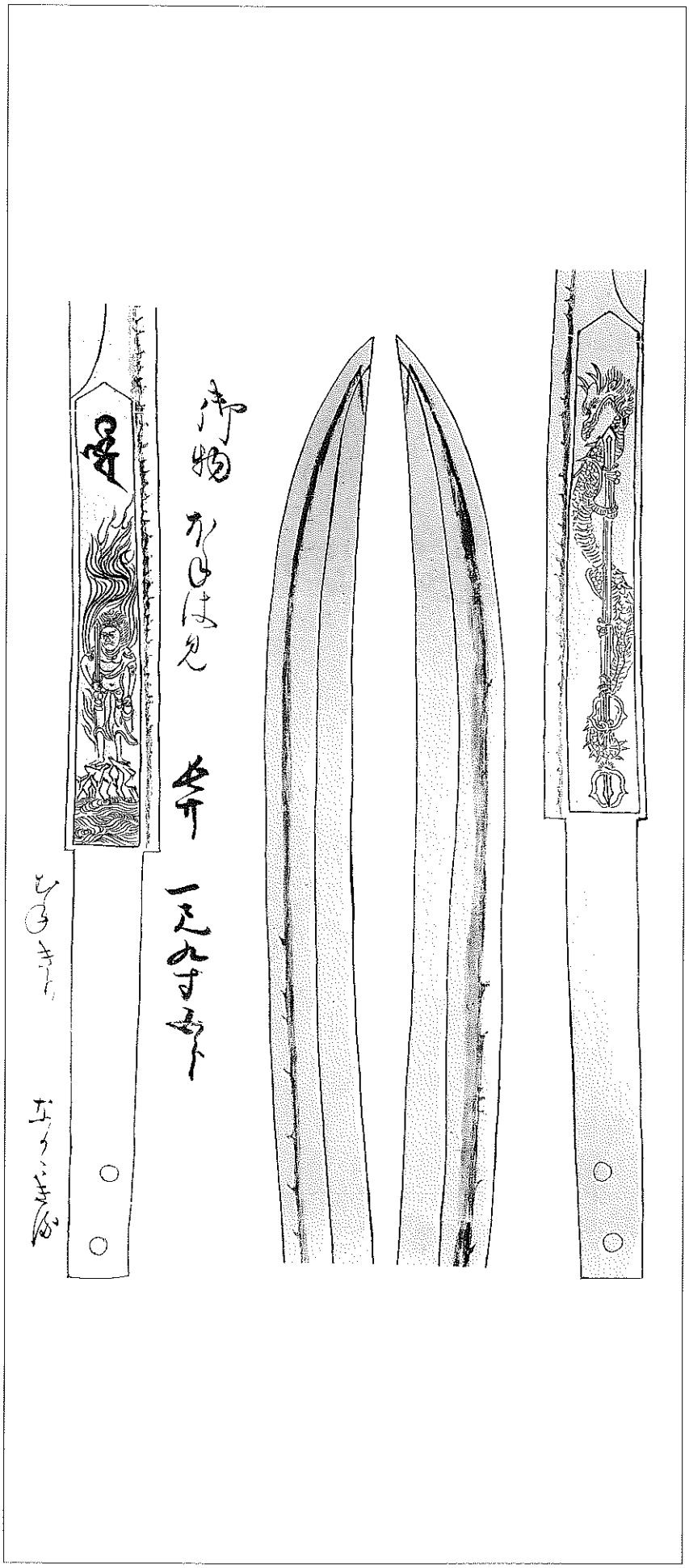
京都 豊国神社

たわむれに切る真似をしただけで、相手の骨が砕けるという太刀。薙刀直し造り、庵棟、身幅広く反りは浅い。地文は小杢目つむ。刃文は中直刃。鋩子はわずかにのたれて先尖りごころに返る。彫物は表裏腰に幅広い剣形樋の中に、指表は倶利伽羅龍、裏は波切不動を浮彫にする。不動尊の上部の梵字は隠刻。茎は磨り上げ、尻浅い栗尻、目釘孔二つ、無銘。

粟田口吉光は、京都粟田口に住み、粟田口一門の名工である。特に短刀の銘手であるが、太刀や薙刀の遺作は極めて少ない。

本刀は『享保名物帳』に室町将軍家の御物として掲載され、かつて大友氏の宝物で、足利尊氏が九州に下向のときに誓詞御味方の証として献上した。その折、すでに「たわむれに切るまね致すにも先の者の骨を砕け死する」故に「骨喰(ほねはみ)」と呼ばれていたという。その後室町将軍家に伝来し、豊臣秀吉へ下賜し秀頼に伝え、大坂落城のときに行方不明となったが、町人が同城の濠から見出し、本阿弥光室へ持参、早速光室は二条城の徳川家康へ持参した。家康は大いに喜んだが重いので、伏見城の秀忠へ遣わした。秀忠は大層喜んで白銀千枚を与えたと記している。

明暦三年(一六五七)の大火(振袖火事)に焼損し、その後再刃される。



『光徳刀絵図集成』(毛利本)

28

重要文化財

刀　金象嵌銘　永禄三年五月十九日
義元討捕刻彼所持刀
織田尾張守信長

名物　義元左文字

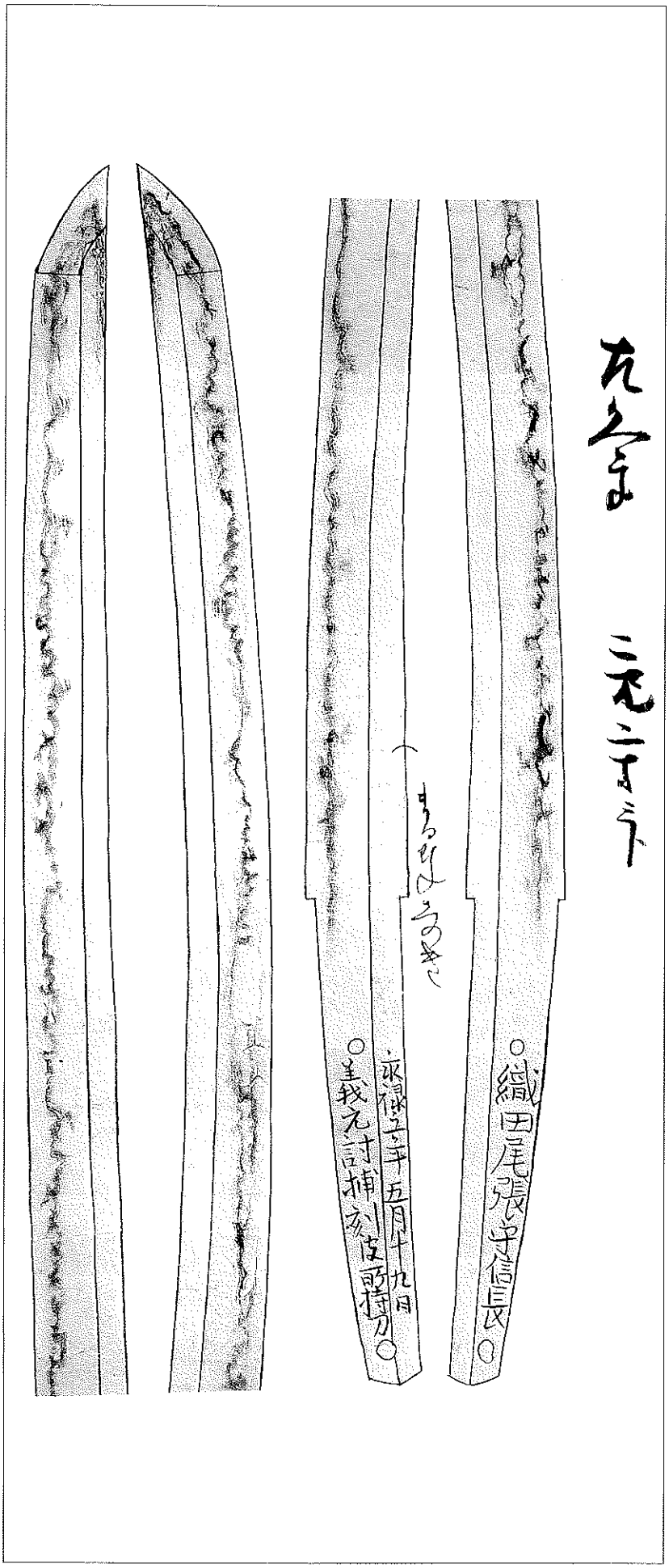
刃長二尺二寸一分（六七・〇㎝）
南北朝時代（十四世紀）
江戸時代（十八～十九世紀）に再刃
建勲神社

織田信長の事跡を刻んだ宝刀。姿は鎬造り、丸棟、身幅広く、鋒猪首ごころ。小杢目つみ、地沸よくつき、地斑がある。刃文は広直刃調に、互の目足入り、匂口締まる。鋩子は直ぐに丸く返る。彫物は表裏棒樋掻き流し。茎は大磨り上げ、表裏に長銘が金象嵌で刻まれている。

左は、左文字や大左とも呼ばれ、筑前国の名工（No.20を参照）。

『享保名物帳』には、義元（よしもと）左文字とも三好左文字ともいう、とあり、もと三好宗三が所持、宗三が武田信虎に贈り、信虎は今川義元へ贈った。そして、『信長公記』には、永禄三年（一五六〇）五月十九日、織田信長が桶狭間において義元を討捕したとき、義元が不断（普段）佩いていた秘蔵の名誉の左文字を召し上げ、信長が不断指さゝせられたと記している。義元の腰にあるときは太刀であり二尺六寸あった。信長はこれを磨り上げて指したが、金象嵌はその後であろう。慶長六年（一六〇一）、『豊家腰物帳』にはすでに金象嵌が施され、伏見城で秀頼から徳川家康に贈ったとある。家康も好んでこれを腰にしていた。

明暦三年（一六五七）三月、江戸市中の大火（振袖火事）により、火を被り、後に再刃され、明治二年（一八六九）、徳川宗家から建勲神社に奉納された。



『光徳刀絵図集成』（寿斎本）

織田尾張守信長